

子どものころ、暗号学

者である父から算数を教えてもらっていた。「算数が基本だから」が口癖で、ドリルを解いて、父が答え合わせをしてくれて。

算数や数学とは、真実を見抜く力である。あるいは、空間の把握や発見力といった「見える力」、論理力や要約力といった「詰める力」を養えるものである。先日、『16歳の教科書』（講談社、7人の特別講義プロジェクト&モーニング編集部編著）を読んでいたら、そんなことが書いてあった。父も、これに近いことを言っていたと思う。

本書は、16歳の高校2年生に数学、国語、英語、理科、社会等のそれぞれに関し、「そもそも何のために勉強するのか？」ということを説いた本だ。大人になった今、読んでみても、自分が何のために勉強していたのかがよく分かる。

確かに、数学・勉強に限らず、子どものころの頑張った経験、苦労した体験が、集中力や思考力、バランス感覚など人間として基礎的な部分を作ってきたと思う。

そして、大人になると社会との接点が増え、より明確に勉強する必要性があるいは今後自分が勉強していくべき分野が分かってくる。一生勉強は続く。大器晩成な人生となるように、今後も頑張っていきたい。



笠原 健治 ④

ミクシィ社長

読書 日記

『16歳の教科書』

「何のための勉強か」を学ぶ

来月の筆者は作家の山本兼二氏です。